

できていますか？ いざというときの備え

防災は「近所」から始めよう

今回、市長と被災経験者である「やまもと語りべの会」の渡邊さんが、地域防災や「自治区」の役割について語り合いました。対談を通じてみてきた、いざという時に役立つ備えや日常のつながりの大切さなどをお話しいただきました。



「やまもと語りべの会」会長 渡邊 修次 氏

東日本大震災当時、宮城県山元町^{やまもと}で中学校の校長を務める。発災当日は卒業式で、学校にいたところ被災。避難所運営等の指揮をとり、学校での避難所生活に寄与した。現在は、山元町にある「震災遺構 中浜小学校」で語り部ガイドをし、被災体験の伝承活動を実施。



近所で近助

市長…災害への備えには「自助」「共助」「公助」がありますが、渡邊さんが震災を通じて最も重要だと感じたのは何でしょうか？

渡邊…発災直後の15分間に助けてくれるのは近所の方です。私は、それを「近助」と呼んでいます。「近助」が最も大切です。普段から「あいさつ」や交流を通じて地域のつながりを深めておけば、災害時に自然と助け合える環境が生まれます。

市長…「向こう三軒両隣」という言葉がありますが、普段の関係づくりが重要ですね。特に自治区に加入すれば、顔の見えるつながりができ、災害時に迅速な対応が可能になります。

知った顔の安心感

渡邊…そうですね。加入世帯は避難所運営や物資配布の情報スムーズに届きますが、未加入だと孤立するリスクがあります。特に若い世代や移住者には、加入することで得られる安心感を知ってほしいですね。

市長…防災を日常生活に取り入れるために、どのようなことができますか？

渡邊…まずは「あいさつ」から始めることです。「おはよう」「こんにちは」と声を掛け合うだけで、地域の中で助けを必要とする人が自然と見えてきます。また、靴を揃える、枕元にスリッパを置くなど、小さな習慣が、災害時に命を守る行動につながります。子どもたちへの防災教育も大切ですね。学校で避難訓練や「まち探検」を行えば、子どもたちが家庭に伝え、地域全体の防災意識が高まります。

